

古今和歌集「仮名序」末尾

かかるに、今、皇の、天の下知ろし召すこと、四つの時、九回りになむ、成りぬる。

あまね おほむうつくし なみ やしま ほか なが ひろ おほむめぐ かげ つくば ふもと しげ
遍き御 慈みの浪、八洲の外まで流れ、広き御恵みの陰、筑波山の麓よりも繁くおは

しまして、万の政を、聞き召す暇、もろもろの事を、捨て給はぬ余りに、古の事を

も忘れじ、古りにし事をも興し給ふとて、今も見そなはし、後の世にも伝はれとて、延喜五

年四月十八日に、大内記紀友則、御書所 預 紀貫之、前甲斐少目官 凡 河内躬恒、右衛門

府生 壬生忠岑らに仰せられて、万葉集に入らぬ古き歌、自らのをも、奉らしめ給ひてな

む。それが中に、梅を挿頭すより始めて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るに至るまで、

又、鶴、亀に付けて、君を思ひ人をも祝ひ、秋萩、夏草を見て、妻を恋ひ、逢坂山に到り

て、手向けを祈り、或は、春、夏、秋、冬にも入らぬ、種ぐさの歌をなむ、選ばせ給ひける。

統べて、千歌、二十卷、名付けて、古今和歌集と言ふ。

かく、この度、集め選ばれて、山下水の、絶えず、浜の真砂の、数多く積りぬれば、今

は、飛鳥河の瀬に成る、怨みも聞えず、細石の巖と成る、喜びのみぞ、有るべき。

それ、まくらことは、春の花匂ひ、少なくして、空しき名のみ、秋の夜の、長きを託てれば、

かつは、人の耳に恐り、かつは、歌の心に恥ぢ思へど、棚引く雲の、立ち居、鳴く鹿の、起

き伏しは、貫之らが、この世に同じく生れて、この事の時に会へるをなむ、喜びぬる。人麿、

亡く成りにたれど、歌の事、留まれるかな。たとひ、時移り、事去り、樂しび、悲しびゆき

かふとも、この歌の文字あるをや。青柳の糸、絶えず、松の葉の、散り失せずして、真栄の

葛、永く伝はり、鳥の跡、久しく留まれらば、歌の様を知り、ことの心を得たらむ人は、大空

の月を見るがごとくに、古へを仰ぎて、今を恋ひざらめかも。

古今和歌集 「仮名序」 末尾 *現代語訳*

さて、今上陛下（醍醐帝）が天下をお治めになって、四季を経ること九度となりました。あまねき御慈しみの波は日本の八洲の外まで流れ、広い御恵の蔭は筑波山の麓の木陰よりも繁っておりまして、数多くの政治をなさっていらっしやる合間に、いろいろなお捨てにならぬという結果、いにしえのことも忘れずにいよう、古びたことも再興しよう、ということ、今は自分でも歌を見て後世にも伝えよう、ということになり、延喜五年（905年）四月十八日に、大内記・紀友則、御書所の預かり・紀貫之、前の甲斐の少目・凡河内躬恒、右衛門の府生・壬生忠岑らに仰せつけられて、『万葉集』に入っていない古い歌に自分たちのも奉らせたのであります。

それらの中で、梅を頭に挿す春から始めて、ホトトギスを聞く夏、紅葉を折る秋、雪を見る冬に至るまでの歌、また、鶴亀によせて君主を思い、人を祝い、秋萩・夏草を見て妻を恋い、逢坂山に至って旅の安全を祈る歌、それから春夏秋冬にも入らぬ色々な歌などを撰ぶこととなりました。全部で千歌二十卷、名付けて『古今和歌集』といえます。

このようにしてこのたび集めて撰ばれて、山の下には水が絶えず、浜の真砂の数ほどもたくさん集まりましたので、今は飛鳥川の瀬のように消えてしまうという恨みも聞かれず、さざれ石が巖となるまで残るといふ喜びだけがあるのです。

さて、我々の言葉は、春の花の派手さが少なく、おなし名誉だけ秋の夜のように長く続くことを嘆いていますので、人の耳に入ることを恐れ、歌の心としては恥ずかしいと思っておりますが、立居や起き伏しにつけても、貫之らがこの同時代に生まれあわせて、この編集に関われましたことを喜んでおります。

人麿は亡くなりましたが、歌の道は残っております。たとえ時代が移り、物事が去り、楽しみ・悲しみが行き交うとしても、この歌の文字は残ることでしょう。青柳の糸のように絶えず、松の葉のように散り失せないで、葛のように長く伝わり、鳥の足跡のように久しくとどまりますならば、歌のあり方を知り、物事の本質を得ているような人は、大空の月を見るように、古を思い、今の世を恋うに違いありません。